



そこに、
君の
死体が
埋まっている

星来香文子
Kayako HOSHINA

C O N T E N T S

そこに、君の死体が埋まっている／山中理	5
そこに、あの子の死体は埋まっていた／本間 愛花	57
そこに、誰の死体が埋まっていた／堀 優香	73
そこに、僕の死体が埋まっている／????	87
そこに、誰が埋まっていたか／山中椿	99
ここに、あれの死体が埋まっている／堀 龍之介	115
ここに、僕の死体が埋まっている／堀 龍起	141
ここに、僕の死体が埋まっていたとして／山中 元	161
ここに、私の死体が埋まっている／堀 龍彦	193
そこに、俺の死体は埋まっていない／花宵	205
そこに、誰の死体も埋まっていない／本間 杏奈	223

そこに、君の死体が埋まっている／山中理



彼の笑顔は、俺には眩しすぎた。

なんの邪心もない、屈託のない笑顔。悩み事なんて何もないような、幸せそうで自信に満ちた笑顔。

実際、彼は恵まれていた。容姿端麗でまるで女優のように可愛いと評判の姉、優しくて美人で料理上手な母親、医者として人々の為に働く立派な父親と祖父、さらに祖母はこの町の婦人会の会長で、曾祖父は町長だった有力者。この町の誰よりも大きくて広い屋敷に住んで、シンプルなデザインの上質な服を着て、欲しいものは、望めばなんでも手に入る。同じ町に住んでいるのに、まるで違う世界の住人のようで、気持ち悪い。他人と比べるのは良くないと頭ではわかっていながら、当時の俺は思わずにはいられなかった。どうしてこうも違うのか――と。

俺には職を失って俺の母の実家に寄生している父親、そんな父親を支えるためにいくつも仕事を掛け持ちしている母親がいて、兄弟はいない。父方の両親はすでに他界しており、会ったこともない。同居することになった母方の祖父母は普通の人で、彼の家のような力

は持っていなかった。

持っているのは築四十年の和室ばかりで、冬になると隙間から冷気が入るこの家くらい。田舎だから辛うじて広い庭がついてはいるが、彼の家のような白い椅子とテーブルがある洋風のガーデンではない。いつからあるのかわからない大きな紅葉の木が一本と、枝が伸び放題の松の木と雑草が生い茂っているだけの粗末なもの。

職探し中の父親は、月に何度か仕事の面接には行っているようだが、帰ってくる度に上手くいかなかったのだとすぐにわかる。着崩したスーツ姿で酒を飲んで帰ってきて、当然のように俺を殴るからだ。溜まっている鬱憤^{うっぷん}を晴らすのに、ちよūdい存在だったのだろう。この時、俺はまだ声変わりもしていない子供で、年齢の割に小さく、弱い生き物だった。唯一の救いは殴られる度に何も言わず手当てをしてくれる祖母だったが、父の暴力を咎めることもせずただそこにいるだけで家事の一つも手伝わない口だけ偉そうな祖父の世話を甲斐甲斐しくしている様子は、なんとも情けなく思えてならなかった。文句の一つでも言えばいいのに。それに祖母は、俺を助けてくれるわりにどこか遠ざけているような節もあった。不思議に思ったこともあったが、面倒くさが勝って結局その理由を聞きはしなかった。

「――ねえ、理くん、聞いている？」

「え……？」

「明日約束したよね？一緒に遊んでくれるって」

「あ、ああ、そうだったな」

そんな俺が中学一年の頃、なぜか彼は夏休みの初日に俺と遊びたいと言いつ出した。

特に彼と仲良くしていたわけではない。俺は元々彼以外のクラスメイトの誰かとも特別仲がいいということはない。

俺は去年の秋に同じ町の小学校に転校してきた、いわゆるよそ者だ。都心から離れた田舎で、小学校も中学校も一学年一クラスが当たり前。当時のクラスメイトが全員同じ中学に進学したため、クラスでの俺の立ち位置が変わることはない。この町にきた時点で、すでに出来上がっている友人関係に割って入ることなど不可能だった。

それでも俺がこの町に来てから半年が過ぎていて、親友だとか、幼馴染だとか、そういう深い関係にはなれなくても、それなりに打ち解けていたと思う。ただ、まだどこか距離感はあった。その中でも、特に彼は頭も良く、スポーツも万能で、いつもクラスの中心にいる……なかなか深い交友関係が築けない俺とは別の世界にいる人間のように思えた。そのため、自分から話しかけるなんてもつてのほかで、彼が唐突に誘ってくるまで、ほとんど話したことはなかった。

「約束だからね？絶対来てよ？」

「うん、わかってるよ」

一学期の終業式の日、彼は何度も俺に念を押した。

一体何を考えているのか、俺なんかと遊んでどうなるのか、当時は見当もつかなかったが、約束を破ったらどうなるかだけはわかっていた。裏切り者のレッテルを貼られ、「あいつは約束を守らない」と揶揄^{からか}われる。彼自身ではなく、彼を取り巻いている他のクラスメイトからだ。

それに、母も曰頃から「彼とは仲良くしておいた方がいい」とよく言っていた。この町で一番の有力者の息子だ。それも、他に男兄弟のいない跡取り息子。うまく取り入れれば、父の仕事先でも用意してもらえると、きっとそんな邪^{よこしま}な考えだったのだろうと、今なら理解できる。

翌日、約束した時間に彼を訪ねると、あの眩しい笑顔で彼は俺を自分の部屋に招き入れた。

外からしか見たことがなかった大きな家。古臭い畳の臭いもしない、フローリングの洋室。壁の扉は押入れではなくクローゼット。立派な学習机に、大きなベッド。テレビにパソコン、ゲーム機、彼一人の部屋だというのに、三人掛けの大きなソファも置いてあった。丸いテーブルの上には、母親の手作りだという見たことも聞いたこともない焼き菓子と、

レモンが浮かんだ冷たい紅茶。外はうだるような暑さだったのに、家の中は涼しくて、不思議に思っているとクーラーが動いていることに気づく。扇風機しかない自分の家とは大違いで、まるで異世界に来たような気分だった。

「僕ね、君とずっと遊んでみたかったんだ」

彼は俺にソファへ座るよう促すと、部屋のドアに内側から鍵をかけた。

そして、俺の隣に座って「ゲームをしよう」と誘ってきた。テレビのリモコンを操作し始めたので、俺はつきりテレビゲームをするのかと思っていたが、彼がつけたのはゲーム実況の動画だった。詳しい内容は覚えていない。その動画の音が子供の声だったことだけは覚えてる。それも、彼によく似た声だ。声変わりの途中のような、子供とも大人ともいえない時期特有の声。

「ルールは簡単。声を出したら負け。ただそれだけ」

彼はそう言うのと、俺の脇の下に手を入れた。

「な……何するんだよ……」

「しーっ、声を出したら負けだって言ったでしょう？ 次出したら罰ゲームね」

軽くくすぐられたかと思えば、その手は俺の体をなぞるように腰まで移動する。その瞬間、ぞわりと鳥肌がたった。

「ちよつと……待て！」

「はい、罰ゲームね。脱いで」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「ほら、早く」

「いや、ちよつと待って！ 今、なんて？」

「だから、脱いで。声を出したら、罰ゲーム。一枚ずつ服を脱いでって言うてるの」

「……なんで？」

俺が戸惑っていると、彼は笑顔のまま俺が着ていたTシャツの裾をたくし上げて、無理やり脱がしにかかる。

「待って、ちよつと！」

抵抗しようにも、彼の力は異様に強い。それもそのはずで、俺はクラスで一番小さかったし、彼は逆にクラスで一番大きかった。一番成長が早く、大人の男に近づいている人間に、成長痛すらまともに来ていない俺が勝てるはずがない。あつという間に脱がされて、Tシャツはソファの下に投げ捨てられる。

「それじゃあ、続けるね」

「え？」

彼はにやにやと笑いながら、俺の貧相な体を舐めまわすように一瞥した後、机の引き出しから結束バンドを取り出して、俺を乱暴にソファの上に押し倒した。驚いて動けずにい

た間に、無理やり俺の両手首を結束バンドで縛り、さっきの続きだと俺の体に指を這わせてくすぐり続ける。

「待って！ やめ……！」

「もう、声を出したら罰ゲームだつて言っただじゃん。次は、下だね」

「……え？」

両手の自由を奪われ、抵抗できなかった。簡単にジーンズのファスナーを下ろされ、両脚を引き抜かれた。彼の指が、今度は下着の上から下半身をくすぐる。これ以上、声を出してはいけない。次に声を出したら――恐怖で頭が真っ白になりそうだったが、必死に堪えた。涙で視界が歪む。気持ち悪い。なんで、どうして、これがどういう状況なのかかわからない。何をされるのかわからない恐怖。下着の上からとはいえ、男として大事なところを触られ、遊ばれている恥ずかしさ。意味が分からない。気持ち悪い。早く終わってくれと願うことしかできなかった。

強く目をつぶる。見たくなかった。自分の体がどうなっているかなんて、知りたくなかった。

けれど、その時、カメラのシャッター音が鳴った。

「……っ」

驚いて目を開けると、彼はいつの間にかスマホのカメラを俺に向けていた。写真を撮ら

れたのだと気づいた次の瞬間には、おそらく、動画に切り替わっていたと思う。

「あ、今声、出した？」

「ちが……っ」

「出たね。それじゃあ、次はこれだね」

身をよじって抵抗したけれど、敵うはずがない。彼は俺の体のあちこちを触って、楽しそうに笑う。彼が満足するまで、この意味の分からない理不尽で最悪な罰ゲームは続いた。

「また遊ぼうね」

いつの間にか気を失っていた俺は、きちんと服を着た状態でソファに寝かされていた。夢だったのかと思ったが、手首にははつきりと結束バンドでついた傷が残っている。痛い。「動画を消して欲しい」と頼んだが、彼は聞いてはくれなかった。それどころか、「次の約束の日に来なければ、罰としてこの動画をクラスのみんなに送る」と言った。中学生なのにまだ安いキッズ用ケータイしか持たされていなかった俺とは違って、クラスの大半がスマホを持っている。それがどういう意味かなんて、すぐに察しがついた。

酷いことをされたと、親にも誰にも言えなくて、夏休みの間、毎日のように彼に呼び出されて、おもちゃにされ続けた。

体を触られるだけじゃない。嫌がる俺に無理やり虫を食べさせたり、水鉄砲に水ではな

く牛乳を入れて俺を的にして撃ったり、時には、赤ん坊のようにオムツを穿^はかせられたこともあった。

彼だけが楽しそうに笑い、嫌がる俺の姿を記録していく。

あまりに気持ち悪くて、意味が分からなくて、怖くて、ところどころ記憶が飛んでいるが、彼のスマホにはそのすべてが残っていると思うと、悍^{おそ}ましくて仕方がなかった。

本当に、地獄のような夏だった。

途中から彼は、自分の部屋だけでなく、外でも同じように、俺の体で遊ぶようになった。小学校の裏にある山が、彼の親が所有する山らしく、そこに秘密基地を作ったのだ。今は使われていないが、昔、何か作業をするために使っていたプレハブ小屋があったから、そこを利用することになった。

「ここなら、思う存分声を出しても大丈夫だよ。誰も来ないから」

彼はそう言ってまた笑った。

俺と会うのは、そこでということが多くなっていった。俺は嫌で嫌で仕方がなかったが、彼の命令は絶対だった。母が期待していた通り、父は彼の親の知り合いが経営している店で働くことになってしまったからだ。後に最悪の偶然だったと発覚したが、当時の俺には彼が無関係だと思えなかった。仕事が決まったおかげで父に殴られることはなくなったこ

とで、もしも俺が彼の命令に従わなければ、その仕事もまた失ってしまうのではと恐れていたからだ。

本当は彼に会いになんて行きたくないのに、逃げることはできなかった。

「理くん、理くん……」

地獄の中で何度も名前を呼ばれて、何度も絶望した。あの写真や動画さえなければ——
そもそも、あの時、遊ぶ約束なんてしなければ、こんなことにはならなかったかもしれない。

彼さえいなければ……

彼さえいなければ……

地獄の中にいる俺は、変わらず何の邪心もない、眩しすぎる笑顔でいる彼が憎くて仕方がない。おそらく彼には、悪いことをしているという自覚が、何もない。

俺が本当に嫌がつているということを、理解していないのか、理解した上でわざとそうしているのか、わからない。

俺はただ、彼さえいなければと、思うことしかできなかった。

そして、夏休みが終わりに近づいたその日、突然空が真っ暗になって、大雨が降り始

めた。

「すごい雨——まるで地獄のような天気だね」

小屋の窓から近くに落ちた雷を眺めていた彼がそう呟いた時、俺の中で何かが切れた音がした。

「地獄は、そんなものじゃない」

気づいた時には、小屋にあった大きなシャベルを振り下ろしていた。

「ふざけるな！　ふざけるな！」

衝撃で床に倒れた彼を、何度も何度も何度も叩いて叩いて——動かなくなるまで叩き続けた。俺のどこにそんな力があつたのかわからない。

けれど、確実に殺した。

そうして、山の中に穴を掘って埋めたんだ。人一人分。彼は俺より大きかったけど、それでも頑張って埋めた。とにかく必死だった。

埋める前に抜き取った彼のスマホは、ロックがかかっていたけれど、何度も解除する瞬間を見ていたから、パスワードは知っていた。すぐに解除できた。中を確認したら、俺の写真と動画が大量に出てきて、本当に気持ちが悪かった。いつ撮られたかわからない、盗撮のようなものも混ざっていて、吐きそうになる。何度か気を失った時があつたから、その時に撮られたものもあつたと思う。すぐにデータを全部消して、近くの川に放り投げた。

濁流に流されて、きつと今頃、どこかの海の底に沈んでいる。

汗と雨でずぶ濡れのまま家に帰って、そこでやっと自分のしたことの恐ろしさに気がついた。震えが止まらない。どうしようと思った。

これから新学期が始まる。俺は、人殺しとして逮捕される。

——なんて最悪な人生だろう。

貧乏だけれど、決して良い暮らしではないけれど、一応は真つ当だったはずの俺の人生は彼のせいでめちゃくちゃになった。何もかも、あいつに奪われてしまったと気づいた時、母が言った。

「理、引越すから準備しなさい」

父の就職先は、確かに彼の親の知り合いが経営している店ではあつたが、この町ではなかった。遠く離れた別の町だった。

2

全部、あの夏に置いてきた。

あの夏から四年。盆も正月も、俺は一度もあの町には戻っていなかった。転校してすぐ

にバスケットに入り、部活を口実にして避け続けた。あの町で起きた出来事は思い出さないように、必死に部活に打ち込んで、部活を引退した後は、高校受験を口実にして……

俺のところに、警察が訪ねてきたことは一度もない。テレビやネットで、山中で死体が発見されたというニュースを目にした時は、彼のことじゃないかと何度も不安になったが、彼の死体は、まだ見つかつてはいないようだ。

たとえば見つかったとしても、俺が犯人だという証拠なんてないと思う。当日は大雨が降っていたし、証拠になるようなものは流されている。そもそもあの裏山をわざわざ掘り返そうとするような奴もいないだろう。当時のクラスメイトとも一切連絡を取っていなかったし、自らあの町がどうなっているか、彼の死体が見つかったのか調べる勇氣はなかった。

しかし、高校生になって二年目の春、初めて彼女ができて少し浮かれていた頃、突然予想もしなかった問題が起こる。

両親が離婚した。

原因は父の不倫で、母は俺を連れて実家があるあの町に帰ると言い出した。

あの町は嫌だったが、父を選ぶという選択肢はなかった。父の不倫相手が取引先の社長令嬢だったらしく、父はまた職を失ったからだ。さらに妻子がいることを隠していたこと

もあり、多額の慰謝料を請求されている。母についていくしかなかった。

二年だけ我慢して、大学が専門学校……進学が無理であったとしても、絶対に他の町に就職しようと決めた。

この四年、何も起こらなかったのだから、きつと大丈夫。そう思って、町で唯一の公立高校に五月から母の旧姓である山中理^{やまなか}として戻ってくることになった。

クラスの八割がああ当時、同じクラスメイトだった生徒。残りの二割は他の町の子で地元の高校を落ちて仕方なくこの町まで通っているらしい。「知り合いが多いんだから、きつとすぐに馴染めるでしょう」と母は言っていた。

校舎は小学校のすぐ隣にあり、彼が埋まっているあの裏山からも近い。あの夏より身長もぐんと伸びたし、苗字も変わっているから……と、気づかれないでいることを願って教室に入った。

「転校生の山中理くんです」

担任の教師に紹介され黒板の前に立つと、教室全体が見渡せるため、全員が顔がはっきりと見える。なんとなく、面影のある生徒が何人かいる。みんな成長したから、誰が誰かまではわからなかった。そもそも、当時のことは思い出さないようにしていたため、名前を聞いてもおそらく何一つ思い出せないだろうと思った。これなら、まったく新しいところに来たのだと思える。何とか残りの二年間、無事にやっていけそうだと、と。

ところが、窓側の後ろから二番目の席に座っていた男子生徒の顔を見て、俺の中で鮮明に、あの夏の記憶が蘇った。

「それじゃあ、席は、堀^{ほり}くんの後ろの席——あそこを使つてね」

彼と同じ苗字で、彼と同じような顔をしたその男は、あの当時のように眩しい笑顔を俺に向けて、言った。

「久しぶりだね、理くん」

記憶の中にあつた彼とは違う、低くなつたこの男の声が、春だというのに、指先から熱を奪っていく。

どうして生きている

喉の奥から出そうになつたその言葉を飲み込んで、俺は笑い返した。

「ごめん、誰だっけ？」

精一杯強がつて、何も覚えていないふりをした。足が震えていることに気づかれまいと、必死に我慢した。

* * *

「なにも覚えていないとか、酷いなあ。まあ、僕も正直あまり覚えていないんだけど」

彼は——堀^{たつき}龍起は、中学一年の春から夏休みが終わるまでの出来事を一切覚えていないと言つた。夏休みに交通事故に遭い、その後遺症らしい。他にもどこどころ記憶が戻っていないところがあるが、生活には支障がないのだとか。

「あの時は本当にびっくりしたよね。夏休みが終わつても龍起くんが全然学校に来なくてさ……確か秋の終わり頃に戻ってきたよね」

「みんな心配していたんだよ。ひき逃げに遭つて、大けがしてさ。しかも記憶喪失なんてさ、なんか漫画とかドラマみたいな話だねって」

昼休み、当時のクラスメイトで特に堀と仲が良かった何人かが集まってきた、昔の話をした。誰一人として名前を聞いても思い出せなかった為、正直に「何も覚えていない」と話すと、なんとなくしか覚えていないようなどうでもいい思ひ出話を聞かされる羽目になった。

適当に相槌を打って、全部聞き流し、堀の様子を窺う。交通事故なわけがない。俺は確かに、あの時、この手で殺して、あの山の中に埋めた。

まだ本格的な成長期が始まる前の中学一年生だったとはいえ、雨水で湿った重たい土を、人一人埋めるのに十分なぐらいに掘つて、自分より重たい人間をその穴に引きずり入

れ、確実に埋めたんだ。仮にあの時点ではまだ生きていたとしても、そうすると土の中から自ら出てきたことになる。あの大雨の中、近くに誰か別の人間がいたとも思えない。運よくあの日裏山に行った奇特な誰かに助け出されたのならば、ひき逃げに遭ったということになっている理由が分からない。

「でも、理くんが小学校に転校してきた日のことは覚えているよ。僕より背が低かったよね？ 今、身長何センチ？」

「……百八十くらい」

「伸びたなあ……僕より三センチは高いじゃん。でも顔はあまり変わってないね。そのままだ大きくなったって感じ」

何食わぬ顔で「お前だって、そのままじゃないか」と言いたかった。変声期を終えて、当然身長だってあの頃とは違うのに、相変わらず眩しいくらいなんの邪心もなさそうな笑顔を浮かべているのが信じられない。

俺はお前を忘れるために必死だったのに、こんな理不尽なことがあつてたまるか。今でも夢にお前が出てくる度にうなされる。その度、俺がどれだけ苦しんできたことか……

「こーら！ いつまで喋ってるんだ！ 授業始めるぞ！」

「げっ！ やべっ！」

午後の授業開始のチャイムが鳴って、教師が声をかけると、みんな慌てて自分の席に着

いた。俺の前の席に座っている堀はそのまま動く必要がなく、ただ前を向けばいい。当然そうするものだろうと思っていたが、その前に堀は俺にしか聞こえないくらい小さい声で――

「相変わらず、可愛いね」

あの時と同じ笑顔で、そう言った。

その瞬間、走馬灯のようにあの夏の地獄が蘇る。またこの男に支配されるかもしれない絶望と恐怖で全身が震えた。

もし、本当はあの日のことを覚えていいるなら、俺はあのことをネタに脅されるだろう。覚えていなかったとしても、堀龍起という人間は、自分が欲しいと思つたものはなんでも手に入れる。そういう人間だ。

四年前と変わらず堀はこの町の有力者の息子で、俺には何も無い。祖父はすでに定年退職をして働いていないが、母は今、堀家の親族が経営している店で働いているし、祖母は婦人会の活動を続けているらしい。できることなら関わりたくはないが、この町で暮らしていく以上、避けては通れない。

ずっと蓋をしてごまかしていた感情と、この体に残っているあの気持ちの悪い虫の力サカサと動く足や羽の味、むせかえるような悪臭、全身を這うあの悍ましい指の感触が、また俺を地獄に引きずり込もうとする。同じ屈辱を味わう前に、どうにかしなければならな

い。今度こそ、確実に、俺は、堀龍起を殺さなければならない。

——叩いて埋めるだけじゃ、ダメだったんだ。

幸いにも、俺は堀の後ろの席だ。いつでも背後から刺し殺すことだってできる。ライタ―でも持つてくれば、火を点けて燃やすことだって。あの頃は俺の方が小さかったが、今は俺の方が大きい。バスケ部に入っていたから、それなりに鍛えていたし、体力も俺の方が上のはずだ。

だが、俺は堀と心中するつもりはない。校内で、それも教室で堂々と人を殺してしまっ
ては、待っているのは別の地獄だろう。俺には未来がある。まだ、十六歳だ。父方の祖父
母は事故で死んだそうだが、そんな不幸でもなければ俺の家は無駄に長寿の家系、日本人
の平均寿命くらいは最低でも生きるだろう。そう考えると、今よりも殺した後の方がずつ
と長い。前科者のままその長い人生を生きるなんて嫌だ。しかも前科者になった原因が堀
だなんて、殺して尚一生を支配されるのと同じことだろう。

堀を殺すには、綿密な計画が必要だ。

事故死か自殺に見せかけて殺すのが一番いいだろう。理想は死んだことすら気づかれな

い完全犯罪だが、俺は殺しのプロではないから、その方法はわからない。最低でも殺人を
疑われても、俺が犯人だという証拠が絶対に出てこないようにしなければ。

そして、火葬場で焼かれる瞬間を見届けてやる。何がどうなつて、あの状況から生き延
びたのかわからないが、最後まで見届けなければ、安心できない。

授業なんて耳に入らなかった。俺は堀のあの頃より大きくなった背中を覗みつけ、殺人
計画を考える。まずは堀の行動を把握する必要がある。あの夏から四年も経っているし、
完璧な計画を立てるには、まずはそこからだと思った。

今すぐにでも殺してしまいたい相手のことを徹底的に調べようとしているのは、はたか
ら見れば滑稽なことかもしれないが、これは俺自身を守るための行動だ。殺したはずの人
間が、生きて目の前にいるこの状況で、正常な人間として生活することなんてできない。

俺の人生は、こんな悪魔のような男に邪魔させない。

俺の視線に気がついたのか、堀は授業中、一度だけこちらを見た。俺はすぐに視線を逸
らして、窓の方を見る。雲ひとつない青い空が、まるで堀の笑顔のようで、憎くて憎くて
仕方がない。今朝のニュースで、今日は例年より気温が高くなると言っていたのを思い出
した。

「——堀さん？ そうだねえ……」

家に帰ってすぐに、俺は祖母にこの四年の間のことを聞いた。何か変わったことはなかったか……特に知りたかったのは、堀が記憶喪失になったという交通事故についてだ。

「堀龍起が交通事故に遭ったって聞いたけど、本当なのかなと思って……」

「ああ、あったわねえ、そんなこと。確か、あんたたちがこの家を出ていってすぐだったかしら？」

祖母の話では、俺たちが引越したその日に、堀は行方不明になっていたらしい。

堀の母親は「もうすぐ夏休みが終わるから、友達の家泊まってくる」と堀が言っていたのを聞いていた。だが、その友達が誰なのかまでは聞いていなかった。田舎の町だし、堀と同じくらいの年頃の子供がいる家とは信頼関係が築かれている。お互いの家に子供同士で泊まることはよくあったし、親戚の家に泊まりに行くも同然の感覚で、堀の母親はさほど気にしていなかったそうだ。

ところが、堀はその翌日、二学期が始まる前日の夜になっても帰って来なかった。当然、学校にも来ないし、親類や心当たりのある家に聞いて回ったが、誰も堀の行方を知らない

かった。うちに泊まっていたという人もいない。未成年の、それもついこの間まで小学生だった子供が突然行方不明となり、連絡もつかない。何か事件にでも巻き込まれたのではないかと騒ぎになったらしい。

「それからみんなで町中を探したんだけどねえ、ほら、小学校の裏山の前にある道路で、倒れているのが見つかった——」

そこは車通りが少ない道路で、防犯カメラの類はなかったが、痕跡からひき逃げと判断された。脚と頭に酷い損傷を負っていたらしいが、堀の父親と祖父は医者だ。ありとあらゆる手を使い、一命はとりとめたが、発見が遅れたこともありしばらく植物状態だったらしい。それから順調に回復して、今に至る。

「犯人はまだ捕まっていないのよ。龍起くんも事故の当時の記憶が全くないから……探しようもなくてね。きつと、この町の人間じゃないわね。ひき逃げだなんて、そんな酷いことするような人間はこの町にいないでしょうし」

「へえ、そうなんだ」

その酷いことをするような人間が堀龍起なんだと思ったが、何も知らない祖母には言えなかった。この町に酷いことをする人間は確かにいる。いや、あいつは真つ当な人間なんかじゃない、悪魔だ。

「あと、変わったことといえば、前のお嫁さんね」

「前のお嫁さん……？」

「龍起くんのお母さんよ。あその息子さん夫婦はすごく仲が良かったはずんだけど、二年くらい前に離婚したのよ。お姉ちゃんの方だけ連れて……理由までは知らないけど、ほら、龍起くんは男の子だから後継ぎでしょう？　だから、お姉ちゃんの方だけ連れていったんじゃないかって。会長さんは龍起くんを溺愛していたしね。離婚すること自体、反対していたでしょう……」

あの腹が立つくらいに幸せそうな家族が崩壊したのを知って、いい気味だと思った。

堀は生まれた時から恵まれた環境の中にいた。辛いとか苦しいとか、何かに絶望したり、誰かに嫉妬したりすることもないような環境が少しでも崩れたなら……

「——でもねえ、息子さん、すぐに別の人と再婚したのよ」

「え？」

「だから、みんな前のお嫁さんって呼んでいるの。それがもう、前のお嫁さんより若くて綺麗な人でねえ。料理研究家っていうの？　テレビとかにもたまに出ていたみたいよ？　会長さんもね、ずいぶん気に入っているみたいで……婦人会でも評判がいいのよ」

俺が知っている堀の母親は、本当に理想の母親そのものに見えた。俺の母親は料理がまるでできない。食べられさえすればいいんだという考えの人で、クッキーの一つも焼いたことのないような人だ。初めてあの家に行った時に出された見たことのない洋菓子と紅茶

は、堀のせいでどんな味だったか思い出せないが、子供の為にそういう手間暇をかけることを苦にしない人があいつの母親なのかと妬ましく思ったことは覚えている。それよりもより良い母親を手に入れたということだろうか？　どうして、いつも、あいつだけ……

まるで世界はあいつ中心で回っているのではないかとさえ思えてしまう。

本当に、存在自体が憎くてたまらない。俺にあんなことをしておいて、そのことを全部忘れ、何食わぬ顔で暮らしていたのか。どうしてあんな奴が助かったんだ。何で生きている。誰が助けた。なんて不公平だ。理不尽だ。神も仏も、あいつに味方したというのか。どうして俺だけ、こんな思いをしなければならないのか——悔しくて、悲しくて、泣きなくなった。絶対に、殺してやる。許せない。

それから俺は、毎日のように堀の後をつけるようになった。

* * *

堀龍起は、相変わらずあの大きな家に住んでいた。洋風だったガーデンは四年前にあった白いテーブルと椅子がなくなつて、黒いアイアンのアンティーク調のものに変わっていた。ピザ窯とコンロが増えているのは、料理研究家だという新しい母親の影響だろう。

堀の部屋の位置は変わっていない。二階の南向きの窓がある部屋だ。朝は決まって、七

時に起きてカーテンを開け、眠そうな表情でその日の天気を確認している。家を出るのは、七時五十分。学校までは徒歩で約二十分。朝のホームルームが始まるのは八時二十分からで、いつもゆっくり余裕を持って歩いていく。

部活はやっていないが、生徒会に入っている。父親と祖父が医者であることを考えれば、当然、卒業後は医学部のある大学に進学するつもりでいるのだろう。学校ではクラスメイトと過ごし、休憩時間は生徒会室か図書室にすることが多い。相変わらずクラスの中心人物で、男子とも女子とも交流があった。特に仲がいいといえる奴はいない。みんな平等に広く浅く接しているようで、誰かと付き合っている様子もなかった。

放課後は生徒会の活動を終えるとその足で家に帰り、月、水、金は家庭教師らしき男が訪ねてきていた。火と木は近所でピアノ教室をしている家に通っていた。

土日は家で過ごすことが多い。だが、たまに町にある無駄に駐車場の広い大型ショッピングモールに遊びに行ったり、新しくできた飲食店に行ったりもしている。それも五、六人の友人と連れ立って行くことが多かった。四年前の夏休みは、そのほとんどを俺と二人きりで過ごしていたのに、今は、特定の誰かに対して、何か酷いことをしている様子は見受けられない。

家族との関係も良好なようで、祖母が話していた噂の新しいお嫁さんとも本当の親子のように思えるくらい違和感は何もなかった。

高校二年生の堀龍起は、あの夏と違って普通の、どこにでもいる高校生だった。

堀の行動パターン、行動範囲を全て把握した頃には、俺はそれなりにクラスに馴染み始めていた。堀とも当然同じ教室で過ごしており、席が真後ろであることから授業で関わることはあったが、当たり障り^{さわ}りのない会話をし、日々をやり過ごしていた。

そうして考えた結果、やはり人目が多い校舎での殺害は難しい。誰もいない場所ですぐ殺す。そうして、誰かにこの罪をなすりつける。自分が犯人だと疑われないようにするには、別の犯人を用意してしまえばいい。堀家に恨みを持つ誰かのせいにするのが一番いいだろう。あれだけ大きな家と土地を持っているのだから、そういう人間がいてもおかしくはない。捜せばたくさんいるはずだ。

しかし、どうやって二人きりになればいいのか。殺意を隠したまま、自然にそういう状況を作るにはどうすべきか、あれこれ思案を巡らせていた昼休みに、堀が言った。

「理くん、来週の土曜日って暇？」

「え………？」

「ほら、理くんが戻ってきてから、まだ歓迎会をしていないだろう？ 町外から来た奴は別として、小中の時同じクラスだった奴何人かで、歓迎会をやるうって話になったんだ」

堀が提案した場所は、例の駐車場が無駄に広い大型ショッピングモールの向かいにある、

アミューズメント施設。カラオケやボウリング、ゲームセンターが一緒になったビルだった。意図して堀と二人きりの空間を作り出すことは難しいだろうが、偶然二人きりになる機会はある。更にうってつけなことに、あの周辺の土日の治安はあまりよくない。町外から来たいわゆる暴走族が何度か問題を起こしている場所だ。数日前にもそこで暴行事件が起きたとかで少しニュースになっていた。運が悪ければ死傷者が出ていたとも。そいつらにやられたことにして、殺してしまおうと考えた。

「ああ、別に、いいけど……」

ついに殺せる嬉しきで、口角が上がりそうになるのを必死にこらえて、快諾した。できるだけ自然に、別になんとも思っていないように。

「本当？ よかったあ」

堀は能天気嬉しそうに笑っていたが、俺は頭の中で何度も彼を殺していた。

4

「——で、他の奴らは？」

「もうすぐ来るんじゃない？ 先に入って待ってようよ」

現地集合ということで、俺は集合時間の五分前に着いた。だが、店の前にいたのは堀だ

け。今日は女子も含めた十数人で集まるはずだったのに、他の奴は誰一人来ていない。先に受付で部屋だけ確保しておいた方がいいと、会員証を持っている堀が受付も済ませていた。

「他のみんなが来たら受付で部屋の番号を言えればいいようにしておいたから、先に行こう？」

「ああ……」

仕方なく堀についていくと、そこはパーティー用のとても広いカラオケルーム。ここ数年の間にできた店ということもあって、部屋の中はとても綺麗だった。禁煙ルームだからもちろん煙草の臭いもない。その代わりドラッグストアで売っているような安い芳香剤の香りがする。隣の部屋からはどこかで聞いたアニソンを熱唱して盛り上がっている声が漏れてきていた。

この部屋に入る前に受付でもらった、飲み放題のソフトドリンク用の取手付きのガラスのコップに、俺はコーラ、堀はメロンソーダをそれぞれ注いだものをテーブルの上に置いた。荷物をソファに下ろして座ると、とても広い部屋だというのに堀は俺のすぐ隣に腰かけてきた。

その距離の近さが、四年前に初めて堀の部屋に入った時と同じように思えて、反射的に俺は堀の斜め前に座り直す。とても居心地が悪い。ようやく二人きりになれたけれど、近

くに堀の存在を感じるのものはものすごく嫌だった。

「どうして逃げるの？」

「に、逃げてない」

それでも、堀は追ってきた。

またすぐ隣に座って――

「嘘だね。いつも僕のことつけていたくせに……」

「え？」

俺の手首を掴んで、放さなかった。

「は、放せよ！」

「嫌だ。僕が気づいていないとでも思った？ 理くん、僕のことずっと見てたよね？」

「何言って……」

気づかれていたことに驚いて、声が震える。動揺していることを悟られまいと、空いている方の手でコーラを飲んだが、何の味もしない。喉だけが異常に乾く。堀は気にせず俺の手首を掴んだまま続ける。痛い。

「ストーカーみたいのに、学校でも、学校の外でも……どういうつもり？」

どういうつもりも何も、お前を殺すための計画を練っていた。そのために観察していただけだ。けれど、そんなこと口が裂けても言えるはずがない。ここでバレてしまったら、

せつかくの計画が台無しになる。

「ずっと待っていたんだよ？ 理くんから話しかけてくれるの……」

「なんで……俺が……お前に話しかけなきゃならないんだよ」

「なんで？ それはこっちが聞きたい。どうして、僕の前からいなくなったの？ 僕たち、あんなに愛し合っていたのに」

「は……？ 愛し……あっていた……？」

何を言っているのかわからなかった。

――愛し合っていた？ 誰が？ 誰と誰が？

「連絡の一つもよこさないでさあ……僕はずっと、君が帰ってくるのを待っていたんだよ？ それなのに、やっと帰ってきたと思ったら、素っ気なくて――これじゃあ、まるで僕たちの間に何もなかったみたいじゃない。最初は少し傷ついたけど、でも、君は僕を見ているのがわかって……すごく嬉しかった。君なりに何か考えがあるのかなって、ずっと我慢していたんだよ？ それなのに、どうして、何もしてこないの？」

「待てよ、ちょっと、待て……意味が、わからない」

「わからない？ 何が？」

「俺は、あの日、あの夏、お前を——……」

殺そうとした。山の中に埋めた。自分を殺そうとしていた人間から、つけまわされて、どうして嬉しいんだ？ まさか、本当に——

「お前……本当に、覚えてないのか？」

「……あの夏？ どの夏の話？」

堀は首を傾げている。演技をしているようには見えなかった。

覚えていないなら、どうして「相変わらず、可愛いね」なんて、言ったんだ？

わかっていて、わざとそう言ったんじゃないのか？ 俺を脅すために、また、あの夏と同じように俺をおもちゃにして遊ぼうとしていたんじゃない……

「理くん。それって、もしかして僕が覚えていない時期の話？ それなら、悪いけど本当に何も覚えていないんだ。父さんの話じゃ、脳の損傷で事故に遭う数ヶ月前の記憶がすっぽり抜け落ちてるんだって。でもね、僕たちが愛し合っていた、証拠はある——」

堀は自分のポケットからスマホを取り出すと、動画を再生して俺に見せる。

「この動画を見たんだ」

そこには、堀の命令で言われたセリフを泣きながら喋っている、中学一年生の、声変わりもしていない子供だった俺が映っている。

『……あいしてる。龍起くん』

あの時、堀をあのにんに埋めた後、消したはずの動画だ。地獄の中で、言われた通りにするしかなかった。小さくて、弱くて、怖がりで、どうしようもない。あの頃の自分が、画面の中にいる。

『だいきだよ、龍起くん』

心にも思っていないセリフを、心を殺して言っていた。正直、これが録画された当日のことは俺も覚えていなかった。堀にやられたことがあまりにも酷すぎて、脳が記憶することを拒絶したのだろう。それを、なぜか堀は嬉しそうに、どこか誇らしげな表情をしながら、俺に見せる。

「——ほら、僕たち、確かに愛し合っていたでしょう？」

『僕も君が好きだよ。大好きだよ、理くん』

最低で最悪のセリフだ。

「僕は記憶がない。だから、君との間に何があったか、何も覚えていないんだ。君が小学六年生の秋に転校して来たことは知っている。そして、この動画を見て、僕たちが愛し合っていたことがわかった」

堀の話によれば、事故の衝撃で記憶がないのは中学に入学した春から事故に遭った夏休

みの間と、意識不明で入院していた数日間。俺が最初にこの町に転校してきたのは小学六年生の秋頃で、その年の秋と冬の記憶はある。

そもそも、記憶喪失であることが判明した時は、その記憶すらなかったらしい。自分が何者かもわからなかったが、家族やクラスメイトたちの協力で徐々に思い出した。

それでも、春頃から事故に遭った夏の記憶だけはいまだにないのだと言った。

「僕が学校に戻った時にはもう、君は転校していなくなっていた。教室に君の姿はなかった。でも、どうしてかわからないけど、ずっと君のことが気にかかっている自分がいた。記憶がないのはとても怖いことだったよ。でもね、僕のパソコンに日記と動画と画像が残っているのを見つけたんだ。ちょうど記憶がない春の終わり頃から、夏休みの終盤までほとんど毎日のように僕は日記を書いていたんだ」

堀が使っていたその日記は、スマホ用のアプリと同期できるものだった。IDとパスワードさえ入力すれば、いつでもスマホやパソコンから閲覧できるようになっている。スマホの方は俺が全部消去して川に捨てたため持っていなかったが、パソコンはログイン状態で保持されていた。俺に見せたのは、その日記の中にあった動画の一つだったようだ。

画面の中に、堀の言う〈愛し合っている〉二人の様子が、堀の視点で歪曲されて書かれていた。気持ち悪い文章が並んでいる。全て自分に都合がいいように、まるで、本当に〈愛し合っていた〉かのような書かれ方をしていた。

俺からしたら苦痛でしかなかった出来事が、全て美化されて、読んだことはないが、独りよがりな陳腐な官能小説のようで——とにかく気持ちが悪い。

あの時、俺が全て削除したデータの一部がネット上にアップロードされていたと知って肝が冷える。個人用の鍵アカウントだが、何かの拍子に流出していてもおかしくはない。

「僕は君のことが好きだった。多分、初恋だったんじゃないかな？　それがいつからなのか正確にはわからないけど、でも、君を初めて見た時から……僕は理くんが好きだった」

「好き……？　お前が、俺を……？」

信じられなかった。それなら、どうして、あんなに酷いことをしたのか、理解できない。ただただ気持ちが悪かった。嫌だった。俺はお前なんて大嫌いだった。だから、お前から逃れるために、山の中に埋めたのに。

——殺したんだ。俺はお前を殺したはずだった。それなのに、どうして……

「そうだよ。好きだから、愛していたから……だから、僕は理くんに会いたくて、会いたくて、毎日、この日記を見て耐えてきた。僕はあまり遠くに行けないから、理くんが夏休みや冬休みに帰ってきていないか、何度も君の家を見に行ったよ。お祖父さんの家だっけ聞いていたし、君に会えば、僕の失った記憶も、全部取り戻せるんじゃないかっ

て……ねえ、教えてよ、理くん。僕に一体何があったの？ あの夏休み、僕たちは毎日のように会っていたんだよね？」

俺の思い出したくない記憶を、あの夏の話聞かせると、何も知らずに求めてくる。今のこいつには、俺に対する罪悪感は何もない。元からそんなものすらなかったようだが、なぜ殺されかけたのか、その理由もわかっていない。全部自分のいいように理解して、俺が話せば失ったその美化された記憶を取り戻せると思っている。

「ふざけんな……！ お前なんか——」

話してやる義理はない。あんな悍ましいことを、俺の口から言葉にしたくない。自分のしたことも覚えていないこんな奴、今すぐこの場で殺してやろうと思った。

俺はいつでも殺せるように持っていたバタフライナイフが入っている鞆に手を伸ばした。その時だった。

「おお、ここか！ 待たせたな！」

何も知らないクラスメイトが三人、部屋に入ってきた。

「え、なにに？ なんかお前ら、距離近くね？」

「……あれ？ もしかして、邪魔だった？」

てつきりまた騙されて、誰も来ないのかと思っていた俺は拍子抜けする。それから続々と人が入ってきて、まったく嬉しくも楽しくもない歓迎会が始まった。

* * *

俺はしばらく我慢して歌を聴いていたが、耐えきれずに一人でトイレに行った。カラオケなのだから歌えと言われて、仕方なく一曲だけ、流行りの曲を歌ってからだ。この町の高校生が遊ぶ場所はここくらいしかない。みんな歌い慣れているようで、それなりに点数も高く、俺は自分の点数が高くも低くもないことが恥ずかしかった。

さらに、一人とてつもなく歌が上手い女子がいて、みんなその子が歌うと釘付けになっている。その隙に、いつの間にか俺の隣に陣取った堀がまた手を握ってきたのが気持ち悪かった。この場にいたくない。でも急に座る場所を変えるのは不審に思われる気がした。一度、トイレに外に出て、戻ってきたら堀から離れた場所に座れば不自然ではないだろうと、そう思った。

男子トイレには誰もいなかった。ここ数年でできた施設ということもあって、掃除が行き届いている。前の町でもこういう施設を利用したことはあるが、そこは古くてトイレも汚い印象だった。用を足していると、誰かが入ってきた足音が俺の後ろで止まる。他が空いているのに、なぜか並ばれていることを不審に思った。妙なプレッシャーを感じ、早々

に済ませて洗面台のほうへ行くと、鏡越しにその誰かの正体がわかる。

堀だ。

堀は用を足すわけでもなく、ただ俺の方をじっと見ていた。鏡の作りなのか、角度なのかわからないが、その顔がとても歪んでいるように見えて、気持ち悪い。気づかないふりをして、手をかざせば自動で出てくる水で手を洗っていると、堀は俺に後ろから覆いかぶさった。

「やめろ！ 何するんだ」

「ごめん。でも、こうでもしないと、理くんは逃げるだろう？」

「放せよ……！」

「嫌だ、ねえ、教えてよ。さっきの続き」

肩に顎を乗せ、下半身を俺に押し当ててくる。

それがあの夏の地獄を彷彿とさせて、俺は動けなかった。ただの非力な小さな子供だった頃とは、違うのに。身長だって、あの頃は俺の方がはるかに小さかったけど、今は逆だ。俺の方が少しだけ背が高い。部活で鍛えた筋力はまだそこまで衰えていない。抵抗できるはずだ。こんなの、簡単に振りほどけるはずなのに、恐怖の方が強かった。

『ずっとこうしなかった。理くんに触れたかった。きつと、僕と君の席が逆だったら、僕は耐えられなかったと思う。ずっとずっと君とあの動画や日記のように、触れ合い

たかった」

「やめろ……俺は——」

あの頃とは違う、成長して骨ばった堀の手が、強引に俺の顔を横向かせ、無理やりキスをされた。押し込まれた舌が気持ち悪い。虫のように蠢いて、逃げてても逃げてても、俺の舌を追いかけてくる。どうして、なんで、また、俺はこんな目に——

「んっ……う」

一瞬であの夏に逆戻りした。あれから四年も経ったのに、俺はまた、何もできずにこの男に支配されてしまうのかと思ったその時、妙な違和感を覚えた。

——違う。あの時と、違う。彼の舌は、こんな風じゃなかった。

そんな気がした。

そして次の瞬間、彼の左目のまぶたの端には、小さな黒子があることを思い出した。近くで見ないとわからないほど小さいが、変わった形をしている、と、あの地獄の中でぼんやり思ったのを思い出した。今の堀には、それがない。

誰だ これは

これは堀じゃない。そう気づいた瞬間、体が動いて、俺は堀を——堀じゃない誰かを思

あの夏から四年も経っている。それも、中学一年生から高校二年生という成長期の真っ只中。まだまだ身長は伸びている。体つきや声もすっかり大人へと成長している。

別人と思われるもおかしくないほどに変わっているのだから、違うのは当たり前のことだ。

その過程で、黒子が薄くなった可能性もくはない。手術で消すことだってできる。でも、それでも、これは違う。俺は、違うと思った。そう、感じた。

理由はわからない。ただ、違う。そう感じた。よく似た別人。

彼のふりをしている偽物だと思った。

「何するんだよ」

「それは、こっちのセリフだ！ お前、誰だ」

突き飛ばした堀とは違う誰かの体は、背中から個室の壁に激突して、ずりりと床に落ちる。真新しいウォールナットの木目調に加工されていた壁は、その衝撃で少し凹^へんでいた。「誰って、何言ってるんだよ。僕は僕だよ。堀龍起。君のクラスメイト。君の友達。君の

恋人」

「違う！ お前は違う！ 堀は……堀龍起は——」

そもそも、恋人ではない。俺は一方的に、何もわからないままおもちゃにされて、脅された被害者だ。したくもないことを無理やりされて、無理やり言わされて、虫や見たことのない食べ物を食べさせられた。恥^はずかしい姿をさせられて、勝手に写真と動画を撮られて……体も、心もめちゃくちゃにされた。

イジメだなんて生ぬるい言葉じゃ済まされない。明確な暴行を受けた。肉体的にも、精神的にも。

あの頃の俺は今よりずっと子供で、自分が何をされているのかわからなかった。彼に触れられる度、自分の体が自分のものではなくっていくという恐怖に怯えていただけだった。だからこそ、今ならわかる。今俺の目の前にいるのは、別人だ。彼じゃない。これは、堀龍起ではない。

「——俺が殺した……生きていくわけがないんだ……！」

その時、俺は初めて自分のしたことを口にした。四年間、誰にも言えずにいた事実。人を殺した。同級生を殺した。自分をおもちゃにする悪魔のような奴を、叩いて叩いて叩いて……動かなくなるまで叩いて、殺して埋めた。自分を守るために、殺した。殺したんだ。見間違えるはずがない。あんなに深く掘って、埋めたんだ。死んでいた。指先一

つも動かずに死んだ。目を見開いたまま死んでいた。

それなのになんだ。どうして、お前は生きている。堀龍起に似た顔で、同じ笑い方をし
て、この町で生きている。こんなのおかしい。ありえない。

「変なの。殺したくせに、なんで君は泣いているの？」

「は……？ 泣いてなんか——」

言われて初めて気がついた。さつきから視界が歪んでいるのは、いつの間にか流れてい
た涙のせいだ。どうして、泣いているんだ、俺は。わからない。何がなんだかわからない。
もう、わからない。

「泣かないで、理くん。大丈夫だから」

「何が……？」

もうこいつが何を言っているのかも理解できなかった。頭も心もぐちゃぐちゃになって、
まともではいられなかった。立っていられなくて、俺は頭を抱えてその場にしゃがみこん
だ。ずっと蓋をして隠していたものを吐き出してしまった反動だったのかもしれない。
身体中の血が沸騰しているように熱く感じる。急に血圧が上がったのかもしれない。頭が
痛い。

わからない。どうしたらいいかわからない。

呼吸もおかしい。息って、どうやって吸うんだっけ……？

「——君はちゃんと殺したよ。そして、あの山に埋めた。大丈夫、彼は死んだ。君が殺し
た。堀龍起を、君はちゃんと殺した」

「それなら、お前は誰なんだよ」

「大丈夫。理くん。今は僕が堀龍起だから、ちゃんと愛してあげるから。ねえ、泣かない
で……？」

「今は……？ お前、さつきから何をわけのわからない事を」

涙を拭^{ぬぐ}って、わけのわからない事をほざいているそいつを見る。そいつはもう、堀龍起
の形をしていなかった。

人間の形をなしていなかった。

泥のような土の塊が溶けて、潰したトマトのように弾け、飛び散った。

* * *

「え………？」

気がつくのと、俺は自分の部屋の布団の上にいた。目玉のような木目の天井板がこちらを
見下ろし、天井照明の紐スイッチにくくりつけた延長コードの先にいるプラスチックの梃
が揺れている。数年前にできたばかりのアミューズメント施設の、綺麗すぎる男子トイレ

にいたはずなのに、どういふことか全く理解ができなかった。

上体を起こして、壁にかかっている時計を見ると、午後四時を過ぎたところ。俺のスマホを探せば、母が子供の頃に使っていた古くて重いお下がりの学習机の上にあるのが見つかった。画面を確認したところ、日付は変わっていない。

「夢……？ いや、そんな、まさか……」

どこからどこまでが夢だったのかわからない。頭が重くて、背中にはびつしよりと汗をかいていた。とりあえず状況を把握しようと、部屋を出て居間に行くと、祖母が婦人会の集まりに行く準備をしている最中だった。

「理、もう体は大丈夫かい？」

「ばあちゃん、俺、どうやって帰ってきたんだ？」

「ああ、それはねえ……」

やはり俺は、あのアミューズメント施設には行っていた。俺を家に送り届けてくれたのは、クラスメイトの男子二人。歓迎会の主役である俺がトイレからなかなか戻ってこないのを心配して探し行くと、洗面台の前に倒れていたらしい。それも、ものすごい高熱だったのだとか。救急車を呼ぼうとしたが、たまたまそこに遊びに来ていた医師と遭遇。その医師の判断で、ただの風邪だろうとタクシーで俺を運んだそうだ。歓迎会は当然ながらお開きとなった。

「もうびつくりしたわよ。体調が悪いなら、無理して遊びに出たりしちゃだめでしょう？ 高校生なんだから、体調の管理くらい自分でできるようにならないと……」

「それで、俺を運んでくれたその二人って、名前は……？」

「ああ、■■さんと■■くんよ。■■くんは、理が前にこっちにいた頃、うちのすぐそばの家に住んでいたわよねえ。あそこの奥さんとは、婦人会でよく会うのよ。今日も会合に来るだろうから、お礼を言っておかなきゃねえ」

名前を聞いても、まったく顔が思い浮かばなかった。それ以前に、はっきりと聞き取れず、祖母が何て言ったのかもわからない。そんなことより、何より気になったのは……――

「それより、どうしてあんなに汚したの？ あそこは新しい施設でしょう？ 泥遊びなんてする場所があるの？」

祖母はそう言つて、俺が着ていた服を指差した。

まるで舗装されていない道路の水たまりの上を爆走した車の飛沫を思いきり浴びたかのように、泥だらけの服だ。洗濯機の前に新聞紙が敷かれ、その上に雑に置かれている。

「泥だらけで、このまま洗濯機に入れたら壊れちゃいそうだから……外で一度手洗いしなさいね。そこにある盥たらいを使つていいから。まったく、小学生じゃないんだから、こんなに泥どろんこにして……」

祖母はそう言い残して、婦人会の会合に行ってしまった。一人残された俺は、その泥を

見てあいつが弾けた瞬間を鮮明に思い出し、震える。
何が起きているのかわからない。あの堀はどうなった？ 俺はちゃんと堀龍起を殺して埋めたと言っていた。「今は僕が堀龍起だから」とも……

わけがわからない。それなら、なんで弾け飛んだ。あれはなんだ。この汚れはなんだ。

「——確かめないと……」

彼が埋まっているか、自分の目で確かめないと——

6

小学校の裏山。四年前の記憶を辿って、腰の高さまで伸びた雑草をかき分けて、辿りついたのはあの夏よりも荒廃が進んでいた秘密基地。あの日以降、きっと誰もここへ来ていない。

南京錠のかかった、錆びついた緑色のトタンの扉。周りに落ちていた適当な石を掴んで、無理やり鍵をこじ開ける。

彼を埋める時に使った大きなシャベルは、雨で洗い流されて、泥も血も残っていない状

態だったのを、この小屋の中に放り投げて鍵を閉めた。とても重たくて、翌日ひどい筋肉痛になったことを思い出した。

埃まみれで転がっていたそれを拾い上げて、窓の前の床を見ると黒いシミができています。確かに残っている血痕。俺が叩き殺した彼の血は床板にこびりついていました。

——埋めたのはどこだったか。

はつきりとした場所は覚えていない。だが、この小屋からそこまで離れた場所ではなかったはずだ。子供の力で掘って埋めた場所。思い出したいくない記憶を必死に辿る。適当に歩いていると、少し傾斜があつて、近くに川があつたのを思い出した。思い当たるところを掘ると、一気にあの当時のことが思い出される。掘って、掘って……埋まっているはずの彼を必死に探した。

気づけばすっかり陽が傾いていた。そこでやっと、シャベルの先端が土ではない白いものに当たる。素手で土を払いのけると、骨だけになった彼の頭蓋骨が浮き出てきた。やっぱある。ここにある。

「あつた。やっぱ……ここにある」

あの小さな子供が、こんなに深いところまで掘っていたのかと、自分がしたことなのに